割礼を受けたい女の子の話

夜ノ幻森

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

割礼を受けたい女の子の話

【Ｎコード】

Ｎ５２７１ＨＢ

【作者名】

夜ノ幻森

【あらすじ】

割礼。ＦＧＭ。

色々呼ばれ方はあるけれど、全ては女性器切除の事。

その儀式に興味を持った女の子が、“安全な”割礼の儀式に自ら臨むお話。

割礼、受けたいです！

それは、とある新聞記事で知った事。
アフリカに生まれ育った女の子たちに課された過酷な通過儀礼。
凄まじい痛みを伴う上に、不衛生な場所で、医療のイの字も無いような未開の地で行われる手術に、少女が泣き叫ぶ。

その様を見て、私は普通に怖いと思った、つもりだった。

だって。そのへんの砂地――よく分からない羽虫が当たり前に飛んでる中、消毒もなしに切りつけ、止血は灰と生卵！
痛みより何よりそっちの方が怖かった。
そりゃ西洋医学が当たり前の欧米人や日本人は恐ろしかろう、と。

だけど。

「え……？　そりゃ、そこも怖いけど、何よりアソコを切るんだよ？　動画のあの子もすごい泣いてて可哀想だったし」

え、あれ……？
いや、そりゃ痛いだろうけど、そこは伝統なんでしょ？

というかむしろ、だ。

私はあのシンプルになった施術後の性器の写真が目に焼き付いて離れない。

あれを見て思わず羨ましい、と。
衛生面や医療面の問題さえ解決するなら。
むしろ受けてみたい、とすら思った。

痛みが怖くないわけではないけど。

男という生き物を苦手として生きてきて。
彼氏も旦那も要らないと考える私にとって。
それは、私にとってとても魅力的な儀式に思えたのだ。

それだけに、あの不衛生な点が惜しい。

痛みに耐えきれない軟弱者、と責められるならまだしも。
ウイルスや細菌に根性で立ち向かうなんてあまりにナンセンスだもの。

そう考えていた私に、とある活動家が声をかけてきた。

「僕、こういうものだけど」
「文化保護活動家？」

ナニソレ胡散臭い、と思ったのは確かだ。

「そう、日本でもあるでしょ、捕鯨とかイルカ漁とか欧米の人たちに難癖つけられて根絶させられそうになってる昔ながらの文化ってさ。
確かに現代人からみてどうかな？　っていうぶんかもあるよ、そりゃ。でも何でもかんでもアチラさんの感性で判断して貰いたくない訳でさ。うまい落とし所を見つけて継続させてこうぜ、っていう団体に所属してるわけ」

そして。
そんな男が私に声をかけてきた理由は。
「割礼、受けてみない？　勿論場所はその辺りの野っ原でなく日本の病院、手術するのも医師免許持った医者。
……ただし基本は儀式に忠実に。
衛生面と知識や技術の面は考慮するけど、元々はその痛みに耐えるってのも通過儀礼の大事な要因だからね、麻酔は使わせないよ。
それでも、割礼を受けたい女の子がいるんだって、君、カメラの前で証明して見せてよ」
なんと。日本の医師なんて法律に尻込みしてそんな依頼受ける人なんて居ないと思ってたよ。
「一応前準備とかあるから、二泊三日で入院してね。そ、この日から。退院の日にはあの写真と同じようになっているよ」
私は。
「……手術費用は？　あんまり沢山は払えないけど」
高校生のバイトで稼げる金額なんて雀の涙だし。
「出演料勉強してくれたらこちらも勉強しようじゃないか」
割礼の様子を録ると言うのだから、つまり私の股間を録るぞと言ってる訳で……
顔にモザイク入れる約束で双方ギャラをチャラにするんで話はついた。

「じゃ、この日。〇〇市の△△病院に来てね」

こうして、私の割礼の日が決まったのだった。

術前準備

それは、本当に。
少し大きな街ならどこでも一つはある、救急病院クラスの病院だった。

本当にここで良いのかもう一度地図とにらめっこしていると。

「やぁ、本当に来てくれたんだ。半分くらい逃げちゃうかな～っておもってたからね。やぁ、その覚悟に乾杯！　んじゃ、おふざけはこの辺にして。僕についてきてくれ」

――うん、普通の個室だね？

彼に付いていくと、外来の奥の入院病棟の一部屋に通された。
「この術着に着替えて」
浴衣のような前開きのワンピースタイプの着替えを渡される。
紐で縛るタイプの慣れない衣類に少し手間取りはしたものの、なんとか着替え終わると。

「それじゃ、次は……」
「……大根おろし？」
「これを食べて下剤を飲んで。これ以降は術後暫くするまで食事はナシだ。水だけは好きに飲んで良いが」
……一応醤油はかかってるけどあんまり美味しくない。
何となくお腹がギュルギュルしてきた？

「下剤が効いてくる前に、看護師に剃毛してもらえ。用を済ませたあとは清拭もな。衛生面こそ今回は大事なポイントになる。そこはおろそかにはできないからな」

下着も着ずに直に着せられた病院着、着たのも早々に足を大きく開いた状態でベッドに寝かせられた。
看護師二人がかりで股間の剃毛と清拭――温かいタオルで全身を拭かれる。

普段触れない場所を、同性とはいえ他人の手が触れ、カミソリの刃が滑っていく感触は酷くもどかしく。
しかし正式はむしろ恥ずかしいとか思う暇もなく、あっという間にサッパリさせられた。……うん、これは植人技だわ。

一応ム股間以外のダ毛の処理はしてきたつもりだけど、カメラ映りを考慮してか、そちらにも看護師の手で剃毛と清拭が行われ。

終わる頃にはお腹がゴロゴロとヤバい音を立て始め、私はトイレに駆け込み暫く個室を一つ占居するハメになった。
……私には理解できない趣味だけど、こんな場面でも喜ぶ男が居るとかで、このシーンも個室に仕掛けられたカメラで録られているらしい。

「今日はもうやる事はない。後は本番の前、明日の朝が忙しいから、今日はゆっくり休んで」

そう、いよいよ私は明日、儀式の手術を受けるんだ。

「もう、逃げる事は許されない。神に認められる一人前の、大人の女になるんだぞ」

「はい！」

「それと、今夜は水は飲んでも良いが明日はまだ飯は食えないからそのつもりで。……ま、痛みでメシどころじゃなかろうがな」

直前準備

「やあ、おはよう。よく眠れたかい？」
「さすがに、期待と緊張とで興奮してなかなか寝付けなかったわ」

翌朝。
ベッドの上に座る私の様子を見に来た先生が、看護師を連れてカーテンの中へ入ってくる。

いよいよ今日。私は今自分のおまたに付いている色んな物とお別れするんだ。

「それじゃ、儀式に向けて最後の準備をしていくよ」

まずは最初に浣腸。
「えっ、昨日下剤……！」
「うん、それで胃から小腸まではキレイになったはずだけど。大腸まで完全にキレイにしないと、大腸菌は怖いからね……」
と、私のすぼまりにイチジクみたいなスポイトをグリグリ～っと入れて浣腸液をチューーっと……、

「あっ、冷たッ！　う、あ、お腹が……」
それは、昨日の下剤の効果がささやかに思える。
激烈な便意と悪寒が私のお腹を襲う。

「はい、まだまだ……まだ我慢だよ……」

「ひうっ！」

……手術の痛みに対する覚悟はしっかり決めてきた私だけど。
こんな羞恥プレイまでは想定していなかった私は小さく悲鳴を上げた。
「はい、良いよ」
ぶりぶりぶり～
人前なのに。
おまるでようやく開放した瞬間の快感に、一瞬開けてはならない扉を開きそうになりました……。
こうしてお腹の中をキレイにした後も羞恥プレイは続く。
ベッドに再び横になるよう指示され、両足を大きく開かされる。
「カテーテル入れるから」
大陰唇を縫い合わせた後、尿と経血の通り道が癒着しない様に入れるものだとか。
「ちょっと痛いけど、力むと余計に痛いから、力抜いて……」
普通なら麻酔成分の入った潤滑ゼリーを使うものらしいけど。
「儀式のためだから。麻酔成分のない物を使うからね」
「くっ……、ああっ、だ、大丈夫、耐えられます」
剃毛されたパイパンオマンコを弄られる感覚と同時に尿道と膣へと侵入する。

膣より尿道の方が強いというのが意外だけど。
一瞬、膀胱と子宮口へカテーテルが入る際に少しズキリと傷んだけれど、そう大した苦痛もなくこれもまた終わる。

二本の管を一本にまとめて縛る。

「よし、これで準備は終了だ。手術は午後イチからだよ。……それと、胸の処置も今日一緒にやっちゃって本当に良いの？」

本来の儀式なら、焼けた石で乳房を焼き潰す、そういう事を行う儀式も、彼女は受けると決めていた。
勿論、現地そのままの儀式では、本来の用途に使うのに支障の出る可能性のあるもの。

「だからね、乳線を傷つけず脂肪だけを溶かす薬を注射するんだ。痛みはあるけど、おっぱいは小さくなるし、妊娠したらちゃんとお乳は出る様になるから」

そう、乳房を焼き溶かされる激痛を伴う儀式になる。
それでも――

「大きな胸をしてるだけで女を《有罪（ギルティ）》」にしたがる男が居なくならない限りはね、彼女たちの意見も一理あると思うのよ

確かに健康な身体を傷つける行為に関してもまた意見のある者も居るだろうけど。
儀式に伴う痛みはその事への罰でもあるのだろう。

「これで。痴漢の類に一切の言い逃れや責任転嫁を許さない身体が手に入る……！」

私はその期待を胸に、本当に儀式の準備が整っているはずの手術室へと歩き始めた。

割礼の始まり

手術室、というとどうしてもドラマに出てくるような無機質な台を、眩しすぎるライトが煌々と照らす――そんなイメージを私はしていた。

が。

これは手術とはいえメスが入るのは腹ではなく両足の間、つまりは股間。
当然私を待っていたのは内診台の様なタイプの者だった。
ただ、普通と違うのは、頑丈そうなベルトがいくつも付いている事だろうか。

部屋まで歩いてきた私は、せっせと手術の準備を進める医師や看護師に、
「今日はよろしくお願いします」
と挨拶しつつ、彼らに促されるままその台に座る。

頭、肩、両腕、胸、腹、腰としっかりベルトで固定されると、「動きますよ～」と。椅子が動き、勝手に私の両足が開かれ、股間が無防備に衆目に晒される格好にさせられた。

そして足も、太ももからふくらはぎ、足の甲までしっかりベルトで固定される。

もう、私が全力こめて踏ん張ってもびくともしない。

そして、脳波や心電図を見る電極をモニタに繋がれ。
口に酸素マスクを当てられた。

カチャカチャと金属音を立てながら、医者がピンセットで消毒液をビッチャリに浸した綿玉を摘み、それで私の胸と股間を拭った。

いよいよ、その時が始まるのだ。

「それでは、割礼を始める。……まずは君が受ける割礼について最後の確認だ」
「はい」
「君が受けるのは現地ではいわゆるファラオ割礼と呼ばれる、クリトリス、小陰唇の全てと、大陰唇の大半を切除した上、大陰唇を縫い付ける、一番過酷と言われる儀式で間違いないか？」
「はい、間違いありません」

「この施術は衛生面、医療的な配慮は行うが、痛みについては麻酔などは一切行わず、かなりの激痛を伴なう。
君はこれに同意した上でこの儀式に臨むのだね？」

「はい」
「さらに胸の処置についても？」
「はい、既に同意書にサインして提出しています」

私に向けられたカメラを前に、私はハッキリと言い切った。

「では、私はこの勇敢な彼女を、確実に一人前の大人の女性へと導こう」

パッと、手術室の壁にカメラが録る映像が映し出される。

壁一面に大写しになった私の股間は消毒液の毒々しい色に染まっていた。
私の股間を染めた綿玉は役目を終えて床へと打ち捨てられ、いよいピンセットがまずは左の小陰唇に狙いを定め――

「それでは、これより割礼の儀式を始める」

消毒済みのカミソリの刃が迫る。
よく研がれた鋭い輝きが、引っ張られた赤い花びらのそのその根本に充てがわれ……すっと引かれた、その様を画面越しに目にした瞬間、激烈な痛みが脊椎を通って脳天を貫いた。

「くっ、うぅぅっ！」

覚悟はしていたが、やはり凄まじい痛みだ。
耐えるつもりだった悲鳴が、食いしばった歯の隙間から漏れてくる。
何とか堪らえようとするも、ダラダラと額からは熱くもないのに汗が吹き出した。
その間にも、カミソリの刃は確実に私の性器のパーツをあるべき場所から切り離していく。

傷口からは赤い血がこんこんと溢れてくる。

ああ、今まさに私は割礼されているんだ。
私はもう高校生だけど、こんなことをされる理由もわからない少女ではそれは泣き叫びもするだろう。
でも、私は自分で望んでこの手術を受けている。
噛まされたマウスピースを力の限り噛み締めて、与えられる痛み

にひたすら耐える。

カミソリが、私の左の小陰唇を削ぎ終わるとそのまま今度は右の小陰唇を削ぎにかかる。

あふれる血が一定量を超えると、生理食塩水であらわれるのだけど、これが素晴らしくしくしみる。

昔、膝小僧を擦りむいたときのマキロンがしみるなど、よく言えた……。

傷口にグリグリ塩を抉り込まれる痛みに生理的な涙が溢れてくる。泣くまい、と思っていたのに、だ。

小陰唇が、とうとう私の性器から完全に切り離された。

次のターゲットは大陰唇。

陰唇の内側の皮をはぐ様に削ぎ切りにされていく大陰唇。

息が、荒れる。

台にきつくくくりつけられているから暴れずに済んでいるけど、そうでなければ大人しく耐えられただろうか？

痛い、痛い、痛い！

しかし、こんなものはまだまだ序の口に過ぎなかった。

まだ、一番敏感な部分が手つかずなのだから。

いよいよ、ピンセットが、まずはソレを覆い隠す皮を剥がし、カミソリの刃が本体から切り離す。

本体ではないが、その痛みは甚大……

「ぎ、ぎゃあああああ！」

直後、本体の根本に切り込みを入れられた瞬間、私は恥も外聞もく、覚悟も吹っ飛び、出せる限りの声で悲鳴をあげていた。
しかし、更にその直後。
切り込みを入れられたクリトリスがピンセットで持ち上げられ神経の束が引きずり出される処置には動かないと分かっていながら、頭を左右に降って叫ぶ。
「あがぁぁぁぁ！」
二股に別れた神経を、カミソリの刃で断ち切られた瞬間の痛み。
よく陣痛の痛みを鼻からスイカとか言うけど、きっとそれすら可愛く思える、この世にこれ以上は無いんじゃないかと思える激痛に、私はもう声すら出なかった。

が、神経は“二股”……、そう、まだ片方残って――

「はっ……、がっ……っ、うっ、」

一瞬眼の前が暗くなったけど、たっぷり酸素を供給され、気絶する事は許されず。

医師は刃物を針と糸に持ち替えて、大陰唇を縫い合わせる作業に取り掛かる。
針はそう太くないものの、採血の注射の針とて刺されれば痛みはある。
ましてや敏感な大陰唇、それも先程削ぎ取られた傷跡を何度も何度も刺し貫かれれば……

「ふっ、うっ、うっ、」
嗚咽が漏れてしまうのも必然だった。

が、この縫い合わせが終われば、少なくとも股間の処置は終わる。

私は、あの写真で見たシンプルなオマンコになれるんだ。

ひたすら続く激痛に、それだけを希望に耐える。

「うん、割礼はもう終わるから。次はお胸の処置をするからね～」

割礼に使われた道具が片付けられ、今度は胸を薬で焼く準備が始まっていた――

胸を薬でやきつぶす

縫い合わされた傷口にあてられたガーゼがテープで固定され、割礼の手術は無事終了した。

が、私に課せられた儀式は次の段階へと進む。

本来の儀式は、真っ赤に焼けた石をアイロンのようにあてて焼き潰す、そういうものらしい。
だけどそれでは乳首や乳腺が火傷でダメになり、肝心の用途である赤ん坊への授乳もままならなくなるのでは本末転倒。

だから、医学的にもっと安全な。
しかし通過儀礼としての痛みはしっかりのこされた。

「では、注射していきます。痛いですよ～」

長く、太い針が２つの膨らみに何度も刺され、少しずつシリンジの中の薬品が乳房の中へと注ぎ込まれている。
決して血管へ注がぬよう、間違いなく皮下の脂肪に薬品が届くよう、医師は慎重に注射を打ち込んでいく。

確かに、針が刺さるのは痛いのだが、所詮注射。
幼児じゃあるまいし、問題なく耐えられる……

「はい、だんだん熱くなってくるよ～」

「！？」

しゅわしゅわと、炭酸が胸の中に注ぎこまれているような。
胸の中、熱く何かが膨張しているような……？

「うわ、熱……ッ、イッた……」

胸の内側を灼かれている。
お灸を当てられているわけでもなければ、勿論本来の儀式のように石やアイロンを当てられているわけでもないのに。
むしろ外皮に素手で触れても何ともないはず……が、だ。
シリンジのついていない注射針を、医師何本も何本も私の乳房に刺していく。
まるでまち針だらけの針刺しのように。
その注射針の尻から透明な脂が垂れてくる。
それを受けるため私の胸に髪を敷き詰めれば、たちまちそれらは揚げ物の下にでも置いたキッチンペーパーのように油でベトベトになった。
先程先生が注射した薬品が、私の乳房の脂肪を灼き溶かしているんだ。

「油を出すよ〜」

と。
乳搾りでもするかのようにギュムと先生の手が力いっぱい私の胸を揉みしだいた。
「ぎゃあああ」
その痛みに私はまたしても無様に悲鳴をあげてしまった。
「はい、もう痛い事はおしまいだから。……いやまぁ、処置の痛

みはまだ当分残るけど。新しく痛い事はもうしないから」

「じゃぁ……」

「ああ、君はもう立派な大人の女性だ」

そうか、私は儀式の痛みに耐えきる事ができたんだ。

私はその誇らしさに、未だ残る激痛の残滓の中にも爽快感を覚えていた。

痛みは確かに辛いのだけど、それを補って余りある満足感がある。

時間が経って痛みが過ぎれば。

私は自信を持ち、胸を張って表を歩ける様になる。

だって、私は割礼の儀式に耐え切ったのだから。

ここは日本で、割礼の文化はまだ根付いていない土地だから、割礼の文化のある土地のようにはいかないだろうけど。

「現地のやり方じゃ、死ぬ可能性も低くないし怖いと思う。けど、これならそういう心配はしなくて良い。手術は勿論痛いけど、今、私は痛みより誇らしさと喜びでいっぱいなの。……あなたも受けてみないかしら？　割礼の儀式。

……そうね、お金の問題もあるか。私はタダにして貰っちゃったしなぁ。その辺も要検討箇所ね。

活動家さん、そこんとこよろしくね？」

儀式のその後

手術後暫く経ったある日。

私は近所のスーパー銭湯に来ていた。

脱衣所の鏡に映るTシャツ姿の私はパッと見Aカップ未満のペタン娘に見えるだろう。

だけどシャツを脱ぎブラを外せば、そこにはしっかり乳腺組織分の膨らみはあるおっぱいがぷるんと顔を出す。

パンツを下ろせば、血丘にこそ陰毛を残しているけど、手術した陰唇に毛根は残っておらず、いわゆるパイパン状態。

かと言って手術してるから、幼児のようなシンプルな筋もなく、ただひっそりと尿道と膣の穴がささやかにあるだけの、私の理想のオマンコがそこにあった。

「あれ、入墨入れました？」

「いや、アホ。ンなもん入れたらこんなトコ来れないでしょうが。私温泉とかスーパー銭湯巡りが趣味なんだから、ヤるわけないじゃん」

「では、これは？」

「焼印」

それは、いわゆる封印。

縫い付けたあとを中心に左右対称の衣装の金属の印象を火で炙って押したヤケドの痕だ。

……これも痛かったけどね。

「……それはまた」
「でもこれでこないだ変態痴漢野郎の言い訳を完膚なきまでに叩きのめしてやったよ。このオッパイとオマンコでどうやって男を誘うんだ？　お前はこの身体をどう抱くつもりだ？　ってな！」

「――これが、今回のケースの証拠映像になります」
「ほう、これならポジティブに考えて計画を勧めても良いかな？」
「ええ、流石に義務までするとと今はまだ反発が強いでしょうが、希望者に限りとすれば、比較的スムーズにいくかと。一度始めてしまえば右へ倣えをしなけりゃ気の済まない日本人ですから、ね」